
問い「探しものは何ですか」 答え「転生前の友人です」

さんすべりあ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

問い「探しものは何ですか」 答え「転生前の友人です」

【Nコード】

N4045Y

【作者名】

さんすべりあ

【あらすじ】

防衛区の外では妖獣が暴れる世界——あるいは時代。主人公は最年少で妖獣を狩るライセンスを得たハンターである。昼は学校、夜は狩り。そんな彼は自分の名が広まることで、友人が会いに来てくれるのを待っていた。

——初投稿なので、温かい目で見ただけだとありがたいです。いろいろ王道のはず。たぶん。違うかな。

プロローグ

ひとつの影が木の下に振れていた。

ゆらり、ゆらり。

木の幹にいた小さな白いものは、たった今それに気づいたようにふっと頭を上げた。黒目しかないつぶらな瞳が、振り子時計のように揺れる影を追う。ゆらり、ゆら。

首を傾げた小さなものは、冷たい朝の空気にぶるりと身を震わせると、苦勞して右前肢を伸ばした。次に左後ろ肢。ぴんつと四肢をつつぱると、一気に木を駆け登った。幹から手前の枝に跳び移り、影へとつながる一番近い位置へと走った。

そして縄は無視して、枝から直接影へとダイブした。

その時、朝日が影を照らした。

長い、膝まである長い髪の若い娘の顔が白い靄の中に浮かんだ。

深く刻まれた苦悶の表情は、爽やかなはずの朝日さえ葬送の色に染め上げた。靄と早朝の光を死装束に変えてまとった娘は、首を吊った際に吐いたのか口元を汚していたが、そうであってさえ厳肅さは失われもしなかった。

白いものはしっぽでバランスをとりながら娘の頭から肩へ跳び回っていたが、彼女の顔に小さな鼻を寄せてフンフンと嗅ぎ出した。そしてカリッと引っかくと、興味を失ったように離れて行った。

健康のために毎朝走っているメタボリック気味の男性が、その木の植えてある神社の境内にさしかかって悲鳴を上げる頃には、その白いものはどこかに去ってしまっただけで誰にも見つけられなかった。

1 卒業式は欠席しました。

「まどかー。聞いたか？ たじまりようこ 田島涼湖の呪い」

突然後ろから声をかけられて、まどかはうるさげに白鳥へと振りむいた。

どこことなく険悪な視線を向けられた白鳥はそれでも粘り、ねば手近な机の上にあぐらをかいて、悪意のない笑みを見せる。

「なんでお前がここにいんだよ」

「はっはっはー、驚いたろ。大成功。一日遅れの卒業証書をもらいに来た友人、一名様ごあんない。それよりさ、聞いた？」

懲りない男だった。

不機嫌になって、まどかは見納めとなる中学校の教室に視線を逸らせた。

不登校その他で卒業式に出席しなかった生徒は何人もいるが、さらに不都合な理由で出席できなかった生徒もいる。まどかと涼湖と、その涼湖の呪いで殺されたと噂されている女子二人だ。

まどかはハンターの仕事で、涼湖と女子たちは自殺で。

いずれにしても、一般生徒の保護者は眉をひそめたはずだ。

「あれ？ まどかって田島と知り合いだった？」

逸らせた視線を追った白鳥が、彼女の机をじっと見ているまどかに気づいてとぼけた声を上げた。

「……友達っていう意味じゃなければ、知ってる」
誰だってそうだ。

「それにしても、ヒトが三年間の思い出に浸ってる時くらい、気をきかせて黙ってて欲しいんだが。お前にそういう気づかいを期待するのは、やっぱり無理なのか」

「まどかが浸るってナニ？ 本気か、正気か、ありえない！」
黙っていて欲しくて適当に言ったら、さらに騒がれてしまった。

もうコイツには何も期待するまいと思いつつ、溜め息をつく。

だが、そんなとぼけた友人に、涼湖の机を見ていたのを気づかれるとは思わなかった。安全な場所だと気を抜いていたせいだ。隙だらけだったかもしれない。

涼湖は全校生徒どころか、区内でも知らない者のいない有名人だった。

悪い意味で。

腰を越えた長い髪と切れ長の目をした彼女は、まるで平安時代の女のようなだった。彼女を見かけるたびに雛人形を思い出したくらいだ。

もっとも涼湖は、まどかが見ているなどとは思わなかっただろう。学校ではいつも数人の信者の熱心な瞳に囲まれて、さらに一般生徒のうさんくさげな視線にさらされていたから。

霊能力があるという噂だった。

無くした物を捜しあてたり、事故を予言したと聞いた。

だから一度、まどかは信者を押しつけて彼女の正面に仁王立ちになっ
てやったことがある。

『オレは円城円。えんじょうまていかハンターとしての名は静義しやぎ』

勇猛で知られるハンターのライセンスを持つことはどうでもよかったのだが、反応を見たくて名乗ってみた。しかし残念なことに、彼女はまどかの期待を裏切った。

『あたしは巫女。加護を望むの?』

涼やかに微笑んだ表情はそれらしかったが、求めているものとは違った。

彼女は静義の名も氣にとめず、望むものも当てられなかった。

『ハズレ』

彼女の信者に無礼だと一斉に非難されたが、氣にもならなかった。席に戻る。内心へこんでいたのは、仲のいい三村の他に誰も氣づいていない。

『何しに行ったわけ。探し人だと思ったの?』

『……ちよつとだけな。そうでなくても、アイツを見つけてもらえるかと思った。でも、ダメっばい』

あれなら山桜桃ゆすらの方が上だ。そう思って頼杖をつけば、勝手にため息が出てしまった。

三村が肩をすくめてメガネのブリッジを押し上げた。

『声かけたんだから、ちゃんと説明して、形だけでも探してもらえばいいのに。あれだと、田島さんのとりまきの恨みを買うかもよ』
『もう関わらない。一回話しかけただけで恨まれてたまるか』

『円城くん、君自分が目立つって分かってないの？ 普通に話しかけるならともかく、女子的には今の、充分にイベントだったよ。だから、恥をかかされたと思われるかも』
『知るか』

三村の懸念けねんは取り越し苦労で、信者がまどかに言いがかりをつけてくる事はなかった。

霊能者と公言する涼湖のことは、それで苛められたりもしてるんだから言わなきゃいいのにと気にはなったが、イベントとまで言われると二度も話しかけるのも躊躇ためらわれた。彼女は孤立していたから、たった一言の忠告でさえ目立つのだ。

いつもまとわりついている信者以外、生徒はみな涼湖から距離を置いていた。

当然といえば当然だ。

自分の常識と違うモノを拒否する大多数と、周りを知らうともしない涼湖。

どっちにも共感できなかったから、まどかは放っておいた。

そして――――涼湖は卒業を控えたある日、首を吊った。

その日から彼女の呪いという噂が流れ始め、今日に至る。

1 卒業式は欠席しました。（後書き）

初心者です。見やすさとか、こんな感じで大丈夫でしょうか。
ひとこといただけると喜びます。ぺこり。

2 あいつにここにいてほしい

「昨日、安部が死んだんだってさ。いじめに加わってた女子グループの。前の一人と似た感じで、錯乱さくらんして走り出して、ベランダから飛び下りたんだって」

放っておいて欲しいのに、おしゃべりな白鳥はまだ勝手に話していた。

「卒業式当日ってのも凄いよなあ。涼湖りょうこってホンモノだったんだって、今さらびっくり」

こっちは、お前がここにいることにびっくりだ。卒業を惜しんでくれる下級生ならともかく、男に待たれても嬉しくない。

「うざい。わざわざ卒業後の学校までそんな話をしに来たんなら、よっぽどの閑人ひまじんだな」

「何だよ、まどかだって妖獣をざくざく殺してるくせに。人の死に興味本位で語るなとか言う？　こんな時だけカッコつけんたって」
「あれは『殺す』じゃなくて『倒す』。生物ですらないんだから」

三年の教室を出て昇降口に向かうまどかを、白鳥がバタバタと追いかけて来る。

この友人に悪気はないのだが、空気を読む力もナイ。

聞いた話だから本当かどうかは知らないが、涼湖が自殺した理由

は最低だった。顔とノリがいい女子グループが、かなりひどい事をしていた。

それを知ってさえ平気で噂話ができる白鳥の神経は、きっとまだかより太く、粗い。

「って帰るなよ。円城センセ、待ってー。違うの、俺こういう話をするために来たわけじゃなくて、本当は三村たちとか皆で卒業パーティしようって誘いに来たの！　きれいどころの女子もいるし、用意はできてるし、だから三村ん家いこう！」

階段を駆け下りたついでにコケて最後の二三段を滑り落ちた友人に手を貸して、まどかは眉をしかめた。

「だったら最初からそう言えって。誘いに来る人選まちがってる。迎えが白鳥だったら話がずれまくるって、分かるはずなのに」

「ひでえ。まどかまでそういうコト言う？　せっかく同じクラスになったよしみで友情を深めようとしてる、この俺の優しさを理解しろ」

「高校か？　お前と同じクラス？」

二人で連れだって中学校を出ると、体育の教師が手を振った。会釈程度に頭を下げるまどかと、両手を大きく振り返して「また遊びに来るっす」とはしゃぐ白鳥。

まったく性格の違うコレと一年付き合わされるのかと思うと、今から疲れる気がした。

白鳥は一応イイ奴だが、隣にいて欲しいとは思わない。できるなら無関係な、遠い遠い場所で幸せになってもraitたい。

そんなまどかの気持ちも知らず、彼は元氣よく初春の街を歩く。

「ガッコから通知来たろ。二組って、三村に聞いたぞ？ 男は、俺とまどかと三村と山本が一緒。よろしくな」

「山本もかよ」

若干声が低くなったのを察して、白鳥が慌てる。

「さすがにあいつは呼んでないから。大丈夫だから楽しもう！ な？ な？」

「分かったからそこまで気をつかうなって。オレとんだけ危険人物だ」

「いやいや、事実キケンなハンター様でしょ」

「人間相手には無害だったの」

どこまでも墓穴を掘らずには済まない友人を、もらったばかりの卒業証書（缶入り）でポコンと叩く。

大げさに騒ぐ白鳥の相手をしていると、神社にさしかかった。

———涼湖が自殺した場所だ。

思わず足が止まっていた。

今はもう何もかも片づけられていて、境内は芽ぶきを待つ風情し

かない。死の匂いもなければ、どの木に首を吊ったのかも分からない。

当然だ。

普通とは違うが、まどかは霊能者というわけではない。

それでも、どうしても気になった。

今ここに探し人にいて欲しいと思った。

「……まどかって、田島が好きだったとか？」

「ハズレ」

もう一度卒業証書で白鳥の頭を叩くと、まどかは先に立って三村の家へと歩き始めた。

3 はんたー十はんたー

数日後の夜。

かすかに物音がした。まどかは曇って星の隠れた空から視線を戻した。

防御区の中ならともかく、外で気を抜くことはない。近づいて来る足音。異質な気配。

三匹が同時に飛び出してきた。

集団で移動するのがこの妖獣の習性だったから、予想の範囲内だ。さらに言えば、最悪の事態として十数匹を予想していたので、数が少なくてちょっとだけ安心した。

狙って来たとはいえ、コレと戦うのは初めてだ。

まどかはすでに抜いていた剣で一匹に斬りつけた。

表面が硬くて一瞬刃が止まったが、踏みしめる足に力を込めて体重をかければ、水晶みたいな音を立てて碎け散った。あとは勢いのままに断つ。

断つというより叩き割るといった方が正しくて、刃こぼれした感触が手に伝わって来た。

「あーあ。せっかく砥とぎに出したばかりなのに」
返した刀で、ミラの魔法と拮抗勝負きっこうをしていた妖獣を両断する。

「砥いだけで斬れる方がおかしいって分かってる？ てか、どう考えても物理攻撃すべき相手じゃないから。ふつうは高位魔法で退治するモノだから！ ああもう、怖かったーっ？」

そこまでの大技を使えないミラは、額にびっしりと冷や汗をかけたまま文句を言った。

「だよなあ。それを一撃で倒すお前ってどうよ」
廃墟の崩れた石柱の上にあぐらをかいた鬼灯きちようが、呆れたように呟つぶやく。

彼も大刀を使うが、その妖獣を倒すのは明らかに面倒とわかっていたので、座って楽をしていた。

が、もう一匹の妖獣が、彼の妹のいる別の石柱の上に向かって行くのを見て、立ち上がる。大刀をふりかぶって柱から飛び降りると、重力を利用して妖獣の背中に一撃を与えた。亀の甲羅こうらのような外装を、加速と重さで押し潰す。

「ありがとう」

少女の濡れたように黒い瞳が、笑みの形に細まる。かぼそい声で山桜桃ゆすらは言い、詠唱をやめた。途端とたんに、まどか達を包んでいた能力増強の力場が消える。

「まあねえ、狩りに引っ張り回してるのは俺だし。ここで山桜桃に

ケガさせちゃったら、お兄ちゃん失格」

「このシスコン。ちよつとは静義しやぎを見習みまったらどうなの。女を地面で戦わせて自分は安全地帯あんちたいって、ありえなくない？」

げし、とミラが鬼灯の背中に蹴りを入れたので、鬼灯は石の断面に似た妖獣の死骸に顔からつつこんだ。容赦ようしやない。

「ひどいなあ。だって俺、こんなのに直接向かったって役に立たねえもんよ。しかたないだろ。これも作戦」

たった今その妖獣を倒したのだから、役に立たないはずはない。割れた外装に余裕でもたれかかってヘラヘラ笑う様子は、ミラでなくともツツコミを入れたくなる。

「偉そうに言うな——っ！」

案の定、ミラはきつくカールさせた金茶の髪を振り乱し、げしげしと彼を蹴りはじめた。

「ぼうりよくはんたーい」

「ふざけんな——っ！」

「……よく飽きないな」

魔法が専門の女性なので蹴っても痛くはないし、鬼灯も分かってやられているので、まどかは口を出したりはしない。この二人はいつもこんなふうで、冗談で本気を隠したり、無言の了承のうちに実力全開のケンカをしたりしている。

ハンターが全力ってどうだよ、と思ったりするけど。心配するだけムダだ。

それでも山桜桃だけは石柱の上でおろおろしていた。

他人の感情より先に『力』が見える彼女には、そのケンカが『力』の暴発と感じられているのかもしれない。薄い肩をさらに小さく縮めて、両手を組み合わせている。

人とは交わらない異質な美をもつ彼女のそんな姿は可憐だと思わなくもないが、小さな村なら一匹で破壊する妖獣を目の前にしても平気で詠唱できるのに、兄と仲間のふざけたケンカに涙目なのは、こっちもこっちで何か間違ってる。

「――北部二〇七番隊、静義^{しやうぎ}。絡居^{らくぐい}の森で甲犀^{こうさい}を三匹退治した」

いずれにしても心配するまでもない三人の日常は放っておいて、まどかは国家保全局の支部へ連絡を入れた。

ここで名乗り、仲間が呼ぶ『静義』という名は、彼が狩りに出る時の登録名だ。

『ミラ』や『鬼灯^{きぢよう}』も同じく登録名称だ。

一人では危険な狩りを成功させるためにハンター同士組んだだけのチームだから、まどかは彼ら三人の本名を知らない。

二年前、それなりに成長して戦えるようになった時、まだ中学生の自分を受け入れてくれるハンターはいなかった。

ただでさえ死と隣り合わせの上、ほとんどのハンターは狩りを職業として行っている。

仕事に、足手まといになりそうな子供を連れて行く大人はいないだろう。唯一受け入れてくれたのが、鬼灯たちだった。

鬼灯は、子供を一人で狩りには行かせることはできないと職員に登録を拒否されていた自分の肩をつついた。――うちに来なよ、と。

予想より全然イケメン！ とはしゃいだのはミラで、山桜桃は鬼灯の後ろに隠れながら自分をひっそりと見つめていた。

その物静かで臆病おくびょうな少女が自分を誘えと二人に言ったのだとは、後から聞いた。

強い『力』を持つまどかがいれば、兄やミラが狩りで傷つくことはないと思っただけ。魔力の鑑定をする人間はいるが、生命力こみでの『力』を感じられるなんて聞いたことがなかったので、初めは単純に驚いた。

そして今は、こっそりひっそり頼りにしてもいる。

自分を見つけたように、もう一人見つけないだろうか、と。

『甲犀を、三匹い？ 相変わらず凄いな。甲羅はお前らで持てるか？』

雑魚雑魚ならいざしらず、大物妖獣である甲犀の輝く外装は貴重だ。

宝石としても価値があるし、その硬さを活かした素材となることもある。

「重いから回収に来て欲しい」

けっこう大きかったので念のため携帯カメラを甲犀に向けると、まだそこにもたれていた鬼灯がVサインを出した。ケンカを一時中断して、ミラも可愛らしくポーズを決めたりする。

『……りょーかい。成獣なわけな。料金は報奨金と外側売った代金から引くって事で、軽トラまわすから』

「よろしく」

その会話から時間がかかりそうだとふんだのか、山桜桃が短い詠唱で妖獣避けの祓いを行った。

兄が彼女に手を差し伸べると、その手につかまり、よろけながら柱から降りて来る。

そして背負っていた羽根モチーフの飾りのついた鞆から、レース模様のペーパーでラッピングした手作り菓子を取り出した。

4 戦場でお茶会を

出てきたのは、山桜桃^{ゆすら}手作りの菓子である。

今日はドライフルーツが入ったパウンドケーキとココアクッキーだった。

ドリンクボトルから紅茶まで注いで用意するので、場は緊迫した戦場から一転して、お茶会になる。

「仕事の後の一杯はうまい。ねえねえ、コレどうやって作るの？
なんか本格的な味」

「そこで『ぷはー』と言ったら、オヤジ決定。俺、潤^{うる}いのないチームなんて嫌だなあ。ついでにコツ訊いたって、作^{つく}んないのに」

「うるさい・うるさい・うるさい。鬼灯^{きぢょうとう}は黙ってお菓子食べてて！
あたしは山桜桃にきいてるの！」

ミラは手近にあった物を投げつけようとして、それが甲犀^{こうぎ}の欠片だと気がついて手を止めた。きれいーとか言って、嬉しそうにデニムのミニスカートのポケットにしまっている。

「……そういうトコは女なんだよねえ」

褒^ほめているのか貶^{けな}しているのか微妙な口調に、またミラがムツと顔を上げる。

さわらぬ神に祟^{たた}りなし、である。まどかはクッキーをつまんだ。
甘い。だが、戦闘でとがった神経を休めてくれる。

「うまいな、コレ」

「良かった」

また二人のケンカにオロオロしていた山桜桃が、小さな笑顔を見せた。

「……」

明らかに年下の二人の方が落ち着いていて、——そしてこのままだと確実にまどかが菓子をすべて食べつくすと思われる、ミラと鬼灯は口論をやめた。急いでクッキーに手を伸ばす。

「成長期は分かるけど、一人で食うなって。そういえばお前、明日から高校なんだろ。こんな夜中までうろついてていいのかあ？」
「別に。どうせ入学式と簡単なオリエンテーションだけだし、寝てもあんまり関係ない」

「いやソレ間違ってるから。オリエンテーション聞いとかないと、正しく単位とれないから。困るから」

「それは大学だろ。鬼灯の実体験？」

「なになに、鬼灯ったら留年の危機なの？　もしかして来年度はあたしと同級生？　ウケるー」

けらけらと甲高い声で笑ったミラは、大物をしとめてハイテンションになっているのかもしれない。バンバンと鬼灯の背中を叩いて笑い続ける。

「あの、ミラ。お兄ちゃんをいじめるの、やめて」

山桜桃が、半泣きでようやく言った。

ミラは今度は少女の首に腕を回して引き寄せ、ストレートの黒髪

をぐしゃぐしゃと撫^なでまわした。笑顔の相手に抵抗もできず、山桜桃は硬直している。

「いじめてないいじめてない。大丈夫よお、鬼灯、頑丈^{がんじょう}だから。それよりお兄ちゃんが留年って嫌じゃない？」

「まだ落ちてないから！ 泣き落して履修届^{りしゅうとどけ}を受け取ってもらったし、明日の再々試で受ければ三年になれるし。だいたいお前、保全局から声掛かってたんだろ。無試験でキャリア待遇って。ソレ蹴ってうちみたいな二流大学に来るなよお」

ミラの瞳がずっと細くなった。

彼女は唇を尖らせ、これみよがしに山桜桃^{ゆすら}に抱きつく。

「キャリアなんて、保全局もあんたもバカみたい。分かんないの？」
彼女が不機嫌なのはわかる。

「必要なのはあたしじゃなくて、北部二〇七番隊の人間。うちのチーム、短期間に凶悪妖獣をざくざく倒しちゃったから、目立っちゃったのよね」

小さな少女はなんとか脱出しようと、ぱたぱたと手足を動かしたが、そのくらいでミラが放すわけがない。ますますぎゅっと抱きしめている。

美女と美少女なので絵柄としては文句なしだが、ミラの瞳にあるのは、その評価がつまらないと思っっている冷静な色。

仲間をからかうフリでもしていなければ、やっていけないのだろう。

「今日の狩りもそうだけど、ハイレベル危険バシバシな場所に行きたがって妖獣倒すのは静義さやぎじゃない？ あたしなんて、入局したって即戦力にならないってすぐに切り捨てられるわ。それくらいなら、大学行って自力で就職でもなんでもした方がマシ」

彼女のプライドが傷ついているのにやっと気づいて、鬼灯は慌てる。

彼はハンターとしての実力もあり、作戦を立てる時は思考も回るのに、こういうところは少し鈍い。

でもたぶん、その鋭さと鈍さのアンバランスをミラは気に入っているのだと思う。

実は自分もだ。まどかは小さく笑った。

「お前なあ、自分が原因なのにそこで笑いますか」

「ミラは分かっている。オレがどうこう言わなくなったら、折り合いなんてちゃんとつけてる。謝ったらきつと殴られる」

それとも（比較的無害な）戦闘中に、蹴られるか踏まれる。

「良く分かっているじゃない。でー？ 静義って、どこのガツコ行く

の」

「南東北」
みなみとうほく

パウンドケーキを一口で食べながら答えるが、ドライフルーツが歯にくっついてしまった。しかもとれない。ちょっと不幸。

「西ナシ高かあ、ウチらの大学から近いね」

「それで選んだわけじゃないけど、募集人数多いから楽に入れるし」

どうせくつついたんだから一個も二個も同じだと、両手に菓子をキープしてみる。

食べるたびに歯にくっつくモノが増えたが、後で気にすることにしよう。

「だったら、道ですれ違ったりするのさ。もし声掛ける時、静義でいいか？」

思いついて、鬼灯が顎に手を当てて尋ねた。

ハンターであることをオープンにしているならそれでもいいが、隠している人間もいる。

ハンターとしての自分と、防御区域内部での自分を分けて暮らしたい者もいるからだ。

防御区域内で暮す人間の中には、凶悪な妖獣を倒すハンターを粗野で怖いだけの存在として考えている者もいる。

それが恋人だったり上司だったりしたら、狩りの仕事をしたくても遠慮する人間が出るかもしれない。

できるだけ多くの人間に妖獣を退治してほしい国家保全局は、そのへんまで考慮してみたわけだ。

お役所仕事のくせに細かい。

もっともその配慮は、人間の生活空間を荒し甚大な被害を出す妖

獣に、本気で困っているという証しでもあった。

「それとも、あたし達にも内緒？」

「や、そんなこと無いけど。オレ、本名は円城円。えんじょうまじか内部で会う時は、まどかで頼むわ」

「お兄ちゃんたちはそのまま呼んで大丈夫。もちろんわたしもね」

本当の名前・真名まなを使ったほうが魔法関係には＋0・1くらい
の修正がつく。生活空間での人間関係に問題がなければ、山桜桃とミ
ラは登録名を実名にしたほうが効率がいい。

「静義、ううん、まどか君……ハンターなのを、隠してるの？」

ミラの腕から脱出するのは諦めて、次々と菓子を食べる様子を見
ていた山桜桃が首をかしげた。

5 探し物はなんですか

「いや。隠してんのは違うんだけど、人探しの一環で」

「ああ。なんか言ってたねえ」

ポンと手を打った鬼灯きりょうを、ミラがどついた。猫に似た吊り目が光る。

「『なんか』じゃないでしょ。中学生がカラダ張って人探ししてるのに、忘れんなドアホ」

……ミラは大阪人なのだろうか？

かなり激しいツツコミに苦笑いし、まどかは山桜桃ゆすらから視線を逸らせた。

探し人の話が出た時の少女の寂しげな雰囲気は、自分が原因だと分かっていてもどうしようもない。

まだ、話したくない。

彼らを信じているつもりだが、全部を打ち明けたら正気を疑われそうで嫌だ。

そう思うこと自体信じられていないと、山桜桃は悲しんでいるのだろうけれど。

「だって詳しく聞いてないからなあ。確か、名前がマスコミに取り上げられるくらいになったら、会いに来てくれるかもって言ったけど」

「覚えてんじゃない。だったら、どつかせるような発言しないでよ」

「イヤ、今のミラじゃなかったらどつかないって」

またもやケンカが始まりそうだったので、まどかはナイナイと手を振ってみた。無関係な時なら放っておくが、自分が話題の時にやられると話が終わらなくて困る。

「日常的に呼ばれて、本当の名前って誤解されたら無意味だから。『まどか』が『静義』^{さやぎ}を名乗る理由ってトコに気づいて欲しいわけ」

「結局説明になってないわよ。なあに、生死もわからない生き別れの家族でもいるのー？」

明らかに信じていない口調で言われた。

まどかは首を横に振った。

ベタすぎる。何時代の感動ドキュメンタリーだ。

「家族じゃないけど、生死は不明かなあ。万が一生きてたとしたって、ここにいるかどうかなんてゼーんぜん分かんないし」

「……それ、売名行為の意味あるのかなあ」

鬼灯に考え込まれて、まどかはまた首を振った。

「いいんだ。やれる事をやっておきたいだけだから」

たぶん自分でも、本当に会えるとは思っていない。ただの自己満足だ。

「もし会いに来てくれたら、どうするの？」
惑う声で山桜桃に訊かれた。

「どうもしない。ただ、いるなら会いたいだけ」

まどかがあっけらかんと答えると、山桜桃が細い眉を寄せ、ミラが深いため息をついた。

そして鬼灯は女性二人の様子にきょとんとして、良く分からないからまあいいかあ、と菓子をつまもうとした。が、クッキーもパウンドケーキも、もはや食べカスしか残っていない。

「静義……」

「食べたかったら、キープしとけて。誰も食べなかったら、いらないと思うだろ？」

「その前にお前が全部食ってるんだ！返せ、山桜桃の手作りをかえせえええっ」

妖獣しかいないはずの廃墟にむなしい遠い吠えが響き渡り、甲羅の回収に來た業者をびくつとさせた。

＊

その夜、また一人少女が死んだ。

同じ中学、同じ人物をいじめていたという共通点を持つ被害者として、三人目。

その窓辺から、白い小動物が走り去って行った。

6 高校の入学式には出れました

入学式はあいにくの雨だった。

「寒っ」

「そりゃ、そんな格好かっこうしてれば寒いだろうよ」

白鳥は、デザインはいいが薄いコートを着て来た。まどかが腕を上げることで友人を引きはがすと、彼は今度は反対隣りにいた三村にくっついて熱をもらおうとする。

「だってイイ女がいるかもしれねーし。第一印象って大切だろ」

「だったら服より行動に気を配れよ。ガキみたいにはしゃいでる時点で、マイナス評価されんじゃないのか」

言いながら、三人で始業式が行われる体育館へ向かう。

南東北高校は防御区域では最も学生数の多い高校なので、小学校や中学校で一緒だった学生が確実にいる。

「まどかに言われると、三村に言われる三倍くらい腹立つぞ。凄腕すいひでハンター様でその外見、努力しないでモテる男に俺の気持ちはわからん。俺はしゃべりと優しさを強調していくのだ。実に正しいアップローチ。さすが俺」

「白鳥くん、今まさに君が僕を三倍けなしてるって理解してる？」

体育館にはすでにたくさんの学生が集まっており、騒いでいる三人には迷惑そうな、あるいは面白がった視線が注がれる。ついでに、

話す内容が聞こえた生徒達は驚きの表情を浮かべている。

「ハンター？ 高校生で？」

「知ってる。一中の生徒で最年少のがいるんだって」

「すごいな」

「やだ、怖いって。あたし小学校一緒だったけど、今はもう近寄れないよお」

ざわめきは、大多数という仮面の下に隠れて発言者の特定はできない。

まどかも誰が言ったかはどうでもいい。無責任な憧憬どうけいも忌避きひも、求めているものとは違う。

探し人が自分の名に気づいてくれればいいとは思うので、そうして噂が広まっていくこと自体は満足だ。

事前に通知されていたクラスを探して歩いていると、そういえば、と白鳥が周囲を見回した。

「山本見てねーけど、しょっぱなから遅刻？」

「さぼりじゃねーの？ あいつ、学校なんてどうでもいい派だろ」
三人と共に同じ中学出身で同じクラスになっていた男子の名をあげた白鳥は、もう一度左右を見回してから、探すのを断念した。
もしいたにしても、人が多すぎて見つけるのは困難だ。

まどかは最初から探す気などない。

山本はまどかがハンターをしているのが気に食わないらしく、機き
げん

嫌が悪そうな時に会うとイヤミを言われた。

さすがにケンカを売って来ることはなかったが、そんな相手の出欠を気にかけてやる義理はない。

「一目目にさばりだと、女子の印象が悪くなるのに」

「白鳥くん、君の頭の中にはそれしかないのかい」

「ない」

断言されて、三村はため息でメガネを拭いた。

聞こえていた女子がくすくすと笑っている。気づいた白鳥がぱつと笑顔を向けた。

「どうもー。ね、ここって二組？ 三組？」

「二組」

ノリの良さに苦笑した女子の一人が律儀りちぎに答え、彼女の前後に並んでいた何人かが互いに笑いあう。女の子同士の、無意味で防御的な、コミュニケーションツールとしての笑い。

「やっと着いたー。入口からここまで長かったー。あ、俺たちも二組」

よろしくー、と自己紹介を始めた白鳥を置いて、まどかと三村は男子の列に移動しようとした。

が、友人の手がコートをつかんでいて放さない。

「「……」」

巻き込まれて一方的な紹介をうける二人を、女子の一団がまたくすくすと見ている。

何人かの視線が好意的に動き、まどかと三村は互いに肩をすくめ

あった。

女子にモテたいなら、自分たちは明らかに邪魔だと思うのに、白鳥はこうしてグループ作り（最終目標はもちろんオツキアイだ）を目指して自滅する。

「あたしは加賀森かがもりほのか、向中むかいちゆうだよ。こっちは江上えがみふゆ冬ね。隣が区立中の湊奈波みなとななみで、その隣が」

加賀森という、はじめに白鳥に答えた少女が周囲の女子を次々と紹介してゆく。

女子の方が男より集団を作るのが早いのは自明だが、入学式が始まるまでのわずかな時間にこれだけの名前を覚えるのは才能だ。

しかしまどかは、感心するより顔をしかめた。

「冬って、春夏秋冬の？ オレ、ハンターの登録名は静義せいやぎってんだけど」

茶色っぽい髪の小さな少女は、困ったように視線を落として加賀森に身を寄せた。

「なあに、円城くんって冬みたいのが好みなの？ そうじゃなかったら、迂闊うかつに声をかけるのはやめてよね。世の中は草食系主流なんだから」

だからこそお役所が登録名にまで気を配るのだ。

ハンターというのは白鳥がしゃべったので、乱暴なのが苦手な女

子は、すでにまどかと精神的に距離を置いている。逆に気にしない女子は興味を持って観察してくる。

冬という女子は前者、そして加賀森は後者だ。

「珍しいね、円城くんが初対面で気にするなんて」

「一目ぼれか？ まさかそうなのか？」

三村が冷静に指摘し、白鳥が調子に乗って騒ぎかけた。

楽しそうな女子と、友人をかばう加賀森のにらみに負けて、まどかは両手を上げて降参した。女子に騒がれそうな時にはこうするのが一番だと、鬼灯きぢようとミラのやりとりで学習している。

「そうじゃないって。はいはい、スミマセン。誤解させたオレが悪うございました」

完全に加賀森の後ろに隠れた少女にぺこりと頭を下げると、本人の代わりに加賀森が笑った。

「誤解はしたのは、その若干一名だけ」

「って俺？ ほのかさーん、それキツイっす」

白鳥が大げさにショックを受けたポーズをとり、笑いをとることに成功している。

面倒くさいことにならなくて良かったと思っていたと、三村が訳知り顔でそつと囁いた。

「理由、言わないんだ？」

「……名前がカンペキに同じだった」

ぼそつと囁き返して、視界の端に映る少女を意識する。

外見的には目立つところのない、普通の高校生だ。

背は低いが、ロリキャラ設定には程遠い（念のため言っておくと、巨乳でもない）。

リーダーシップのある加賀森のかげに埋没まいぼつしている。性格は今見たとおり臆病おくびょうかもしれないが、それだってまどかが声をかけた時からで、その前までは他の女子と共にきやあきやあ盛り上がっていた。どこまでも普通。

「探し人？」

まどかが誰かを探していると知っている三村がまた踏みこんできたが、即座に首を振っておく。

「また玉碎たまくだ」

冬も涼湖りょうこと同じだった。『静義』という名を聞いても反応しなかった。

互いに名前しか手がかりがないのに、この調子だと一生見つからないような気がしてくる。だいたい、自分はいいとして向こうの名前なんて普通にありそうで困る（実際、ここにも一人いたしな）。

それ以前に、生きてない確率だって高いし。

また会おうなんて約束なんてするわけもないが、しておけば気持ちの持ちようも少しは違ったのかと思う。いまさらだが。

「田島さんの時とは反応が違うね。探し人じゃないのに気になるんだ。円城くん、それってやっぱり一目惚れなんじゃないの？」

こちらの話は、白鳥の大げさなパフォーマンスで女子には聞こえていない。ほっとして、まどかは友人に冷たい視線を向けた。

「白鳥菌に感染したなら、こっちに来んなよ」

「根拠は君の視線。僕の意見と、彼の思い込みを同列に扱わないで欲しいな」

突き刺さる白眼視をものともせず、三村はメガネのブリッジを指で押し上げた。

7 ひまなので、状況説明を試みる

＊

近年、ある時を境に全国各地で奇妙な獣が跋扈^{ばつこ}し始めた。

否^{いな}、仮に獣と分類されているが、ソレはそもそも生物なのかどうかさえ分からない。

少なくとも動植物という概念^{がいねん}の上にはなく、系統図など作るのは不可能なモノ達だ。暫定的^{とりあえず}に、今までいなかったモノを総称して妖獣と呼んでいるだけだ。

生命体の進化は、生存のために起こる。

大地が渴^{かわ}いたら、乾燥から身を守る粘液^{ねんえき}を出したり、あるいは乾燥に耐えられる層を持つ皮膚^{ひふ}に作り替える。

天敵がいるなら、見つからないように外見を変えるか、襲われても食われないように毒や針を身にそなえる。

それでも駄目なら生息地を変える。
できないものは死滅するだけだ。

そういう、原因と結果がある程度推測できるのが生物だ。

大雑把^{おおざっぱ}でいいなら単細胞生物から人間までの系統樹が描けるのも、その過程^{かてい}がなんとなく予想できるからだ。

だが、妖獣には一切の生物の常識は通用しない。
いっそ無生物に近い。

例えば昨日まどかが倒した甲犀こうさいは、犀さいに似た姿かたちをしているが、背骨がない。そして、甲羅こうらのように固い外装といってもそれは、生物なら身を守るために発達してくるべき本来の甲羅でも皮膚でもない。

なぜなら守られるべき内臓がないのだから。

その体は、岩に似ている。表面が輝石きせきで残り全ては玄武岩げんぶがん。そういう表現をして間違いない。

そして、さまざまな形のモノがいるが、一種類一種類、その存在は断絶している。

彼らに共通しているのは、無機的事であることと、周りにある物を片っぱしから壊しまくるといふ行動原理である。

家があったら家を壊す。人がいたら人を殺す。歯向う同族がいたら、どちらかが倒れるまで闘い続ける。

迷惑だが分かりやすい行動だと、まどかは思ったりもする。

どこかの詩人気どりのハンターが、妖獣は神のみた悪夢だと言っていたが、たぶん違うだろう。

妖獣に荒された町や村のありさまは悲惨で手の施しようもないが、そこには残酷性も悪意もない。

あるのはシンプルな破壊だけだ。

もし本当に神が悪夢をみるのなら、そこに描かれるのは人間だと思う。

頭脳を持ち、まがりなりにもこの大地に君臨してきた悪夢の具現である人間は、その知識と能力をフル稼働して妖獣を退治しようとしてきた。

その間に国民や居住可能な街が半減するという壊滅的被害を受けたものの、国家保全局は、ミサイルや銃、人海戦術で何とかなるタイプの妖獣はすべて絶滅させた。

現在残っているのは、それだけではどうしようもなかった頑強で凶悪で厄介なモノだけである。

まどかにとっては雑魚だったとしても、一般人にしたら抵抗不能な無慈悲な破壊者だ。

そういうモノが未だに無数にいる。

なので、ハンターには妖獣の発する精神を狂わせる咆哮に耐え、そのうえで結界や無数の詠唱で武装し、突入することが求められる。

報奨金はけっこうな額なので一獲千金を狙う者もいるが、実際は大勢でパーティを組んで一、二匹を退治フルボッコというのが常識だ。

一人頭の分け前は、防御区域内で地道に働くサラリーマンや職人を多少上回る程度くらい。現場で死ぬこともあるので、残念ながら人気の職業とはいえない。

とはいえ、防御区域はそのハンターたちと保全局のパトロールで守られている。

市民の関心も多く寄せられている。

野蛮やばんだろうが粗野そやだろうが、簡単に目立ちたいと思ったらハンターになって実績をあげまくればいいというまどかの発想は、実は正しかった。

＊

8 でも式途中で抜けたけどね

「……よって本校は文武両道の精神を養い、修身を目標に……」

長い長い校長の話が続いていた。

長すぎて、もはや誰も聞いていない。

目立たないように欠伸あくびをする生徒と、表情だけは真面目まじめに生徒を見守っているふりの教師。全員がだるさと嫌気を感じ始めたころ、突如とつじょサイレンが鳴り響いた。

緊急警報。

妖獣が防御区域内に入り込んだ印だ。

まどかは誰より早く身をひるがえすと、眠気を振り払って始業式を脱出した。

雨の校庭を走り抜ける。

「ガンバって来いよー！」というトボケタ白鳥の声援に、保全局からのアナウンスが重なる。

『北地区D区画より蟻ぎしやう嬢八匹が侵入。北地区二十五から二十八までの住民は保全局員の誘導に従って避難してください。避難区域付近の方々は、避難準備をお願いします』

まどかは小さく舌打ちした。

避難を指示された地区は、まさにここだ。

貴重品すら持たずに走る住民をよけながら逆走するのは面倒くさい。

人の波をかき分けて家に戻り、剣を持ってまた走る。

おかげで時間をロスした。

白昼堂々妖獣が侵入するなんて滅多にないが、こんな時のために学校に剣を持っていたでもいいだろうか？

却下きやつかされること間違いなしの感想と共に、保全局の誘導と逆に進んで超巨大アリ（に見える何か）を探す。蟻嬢は、蟻ありだとしたら超巨大だが、実は体長は三メートル程度ていどしかない。ビルや家に隠れてしまう大きさなので、どこにいるか分からなくて困る。

「鬼灯きちよう！」

やがて同じ方向に走っていた鬼灯とミラを見つけて叫ぶと、二人はちらりと振り向いて頷いた。

「ちょうど山桜桃ゆすらが感知したとこだ。二十六区にまだ二匹残ってるそうだから、行くぞ」

補助的詠唱や『力』の感知は得意だが、運動能力低い山桃桜本人は、まだ追いついていない。それでも蟻嬢二匹なら問題はなさそうだった。

まどかは走り、鬼灯たちを追い抜いた。

逃げてゆく市民はだいぶ少なくなっている。

いるのは同業者と保全局員。

ならばもういいかと、剣を鞘さやから引き抜く。

走り方を変えた。斜めに腰を落とした構えの姿勢で、すり足で走る。

今の世では誰もやらない、古いにしえの隠密の走法。

半身を返して攻撃の当たる面を減らし、前にわずかに泳がせた左手は突然の攻守に対応できるように準備されている。剣を握った右手さえ、肘をほとんど抜かずに脇の急所を隠していた。

正々堂々が誇りである武士とも、影の戦闘集団である忍びとも違う、独特の構え。

まどかが体得たいとくしているのはそういうものだ。戦場においてそれは、魂に浸みついた本能に近い。

上から降って来る酸の液をかいぐり、赤銅色の腹に剣を突きさす。

同時に、地面を蹴って跳ねあがる。一回転する。剣が動きに連動して、蟻嬢の体を二つに裂いた。噴火の際にできる空気を多く含んだ軽石のような体は、簡単にしとめられる。

遠目に着地すると、狂ったように暴れる蟻嬢に鬼灯がとどめを刺していた。もう一匹もミラの魔法で粉々に吹き飛ぶ。

「一丁上いちぢやうがりー」

「……ミラ」

語尾のはずむ口調で楽しげにポーズをとる女は、周囲さんじやうの惨状を完

全に無視していた。

元巨大アリだった破片が近所の家や道路に飛び散っているのは、デモの投石後みたいだ。血でないだけマシだが、軽石の空気穴部分に溜められていた酸が吹っ飛び、雨に薄められてさえあちこちを溶かしている。

「俺たちができるだけ被害を抑えようとしてるのに、味方のお前が拡大してどうするよお」

「だってどうせ他の壊された家とか、ここのアスファルトと一緒に政府が直してくれるんでしょ。ちよっとくらい大技使ってもいいじゃない」

「よくないと思います。」と

投げやりに応じた鬼灯は、ミラの腹に腕を回すと、いきなり後ろへと跳んだ。

9 実戦その1

「きゃ……何すんのよ!」

げし、と彼女の肘が鬼灯きちようの肋骨ろっこつに叩きこまれたが、刹那せつな、その金茶の髪が数本切れて舞い上がった。

ミラがいた場所を、蟻嬢ぎじょうの牙が通り抜けて行った。

「なんで? あたし倒したのに!」

答えはすぐに明らかになった。二つに裂かれた巨大アリの体から細かな気泡を立てて流れ出ていた酸から、ぽこりと新たな蟻嬢が顔を出したのだ。

ぽこり、ぽこり、ぽこり……

一つ、二つ、三つ……、と赤胴色の頭が、アスファルトさえ溶かす酸の中から新たに産まれ出る。ぴしゃりと液体の音がして、一匹が前脚を地面にかけた。ずるりと体を酸の中から引き出し――――

一気に飛び出した。

爆発したかのように、大量の蟻が視界を覆いつくす。

「何コレ――――っいや――――っ! あたし、わけ分かんないの大っ嫌い?」

逆上したミラの魔法がその一帯に炸裂した。
ますます吹き飛ぶ酸。そこから無限に湧き出る蟻嬢。

数十匹に増えたそれらは、無表情の眼で一斉にこちらを見た。

さすがにまどかもゾツとした。

「ほんとに、コレ何だ？　こんな聞いたことないぞ」

「蟻嬢では初めてだろうなあ。ただ、他のハンターと飲んだ時に似たような話は聞いた。倒しても倒しても増える、突然変異種みたいのがいるって」

一カ所にかたまっているのは危険なので、まどかはわざと大きな動作で塀を蹴り、他人の家のベランダに立った。

すべての蟻嬢が首を振って、視線を向けて来る。その隙に鬼灯も、ミラを抱えて平屋の家の屋根の上に飛び乗った。濡れた屋根に足を滑らせかけている。

「じゃあそのハンターはどうやってその無限増殖を切り抜けたんだ？　どっか急所でもあったのか？」

蟻嬢の一匹がベランダに前脚をかけたので、頭部を一刀両断にしてみる。

巨大アリは庭に落ちて動かなくなったが、階下でもものすごい絶叫が聞こえた。

逃げ遅れた人間がいたらしい。確かに自宅にあんなのが転がっていたら、嫌だと思うが。

「まったく。避難勧告うけたらサッサと逃げろって」

体調が悪かろうと、介護が必要だろうと、逃げなかったら妖獣に殺されるだけだ。ハンターも保全局員も全力を尽くすが、それは個々の人助けではなく妖獣退治がメイン。自分の命は自分で守るのが、この社会の暗黙のルールだ。

「おい、中のヤツ！ こうなったら絶対出て来るなよ。その死骸が怖くても、今から避難しようなんて考えるな！」

まどかは庭に飛び降りて、自分より大きな蟻嬢の死骸をつかんだ。塀の上から襲ってくるアリもどきの頭を叩き斬りながら、庭を横切る。ひきずる死骸を突き破ってもう一匹が出てきたら、軽傷では済まない。それは分かっている、人のいる民家の庭に置きっぱなしにはできなかった。

上から蟻嬢が噛みつきにかかってくるのを、剣で払う。――こり、と手元で音がする。

彼らは目先の獲物に気を取られて、家の中に人がいるのには気づいていない。――こり。

もう少しで門だ。

さらに一匹の首を落とした。――こり……カリ……カリ。つかんでいる死骸から聞こえる音が、いつしか変わっていた。カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ……

「っ！」

まどかは背負い投げの要領で、蟻嬢ぎじょうの死骸をおもいきり門の外へ放り投じた。

同時に、だらりとした体を食い破り、大量の酸と共に新たな蟻嬢がこちらへと一直線に飛んでくる。

迎え撃つには体勢が不十分。まどかは投げた勢いのまま、前方へ転がった。

受け身から立ち上がり、覆いかぶさって来た蟻嬢に剣を突き刺し、横をすり抜ける。皮膚抵抗ひふを受けた剣は重かったが、止まらずに駆け抜ければ、脇腹わきばらを砕かれたアリもどきは地響きを立てて倒れた。

それも門の外に放り投げる。

と、聞きなれた声が詠唱を完成させた。

「これでもう増えないからっ」

道路の真ん中で、ようやく追いついた山桜桃ゆすらが小さな唇を引き結んだ硬い表情で立っていた。安全な場所など選んでいる余裕はなかったのだろう、妖獣の攻撃を受けたら一撃でおしまいなのに、彼女は無防備な位置にいた。

まどかは反射的に門を飛び越え、彼女と蟻嬢の間にすべりこんだ。

大刀を持った鬼灯きちようが隣に並び、屋根の上からミラが広範囲な魔法を飛ばす。本気になったミラの手加減ナシはとんでもなく派手だったが、今度は鬼灯とがも咎めなかった。

「っせ——っ？」

鬼灯は掛け声とともに、鬼神の働きをした。大柄な彼の体ほども

ある大刀が、縦横無尽に蟻嬢の群れを切り裂いた。一振りで複数の頭部が碎かれ、尾部が飛ぶ。もう一步進んで大刀を一閃させれば、また幾多の蟻もどきが崩れ落ちた。

「……二人とも、ここが防御区域内って忘れてるかもな」

鬼灯にわずかに出遅れたまどかは、二人の攻撃を逃れてきた数匹をさっくり片づけて一息ついた。

うしろでは、山桜桃が別な詠唱を始めていた。

防御の詠い。もちろん無力な彼女自身のためでなく、現場に立つ鬼灯とまどかのためだ。

逆にいえば、彼女はまどかが守ってくれることを信じている。

しかし、詠唱が終わる前にミラが屋根から滑り降りて来た。

「おっしまーい。あーあ、シスコン炸裂しちゃって」

「そう言うミラも魔法がでかすぎでしょお。電線が折れてるんだけど」

酸を浴びてところどころ赤くなった肌をさらした鬼灯が、巨大アリもどきの死骸を踏み越える。詠唱をやめた山桜桃が兄に駆けよって、背負っていたバッグから救急セットを出して治療を始めた。

「――北部二〇七番隊、静義だ。北地区二十六で蟻嬢を退治。数は、はじめ二匹。突然変異種だったから増殖し始めて、最終的には……何匹だろう?」

「しーらない」

ゲリラ戦でも起こったかのようなとんでもない状況から、ミラは
一早く視線を逸らせた。

出来るならまどかだって、そうしたい。

折り重なる蟻嫌の数なんて数えたくもないし、それ以上に折れた
電柱と抉られた地面、切断されたフェンスや塀など見たくない。

酸で溶け、黒ずむ家や道路は妖獣の被害だが、それよりひどい損
害を与えたのは二人の仲間だ。はつきり言って、妖獣よりワルモノ
だ。

『変異種か。厄介なのにあたったのがお前達で良かったかもな。そ
うでなきゃ、ハンターや住民にまで被害が出るところだった』

連絡を受けた保全局員は、ポジティブシンキングの持ち主ではな
くて、実情を知らないだけである。

「そう思ってくれるなら、ここの復旧は保全局持ちで頼む。オレ達
もちよっとやりすぎた気はするから、報奨金ほうしょうきんは辞退するんで。ヨロ
シク」

『え?』

何も知らない保全局にすべてを押し付けると、まどかは実戦で培
った俊敏さを総動員して通信を切った。

10 吾輩はバカである。

「やったな。こんなの直せって言われたら、この歳にして借金持ちになるところだった」

「やっぱ交渉は静義しやぎに任せるに限るわねー」

ミラは山桜桃ゆすらの前に両手を出した。ノリについていけない少女は、その手のひらにそっと自分のあわせた。ぎこちなく、ミラと同じ方向に首をかしげる。

「ね、ねー……？」

それでいいの、とミラは満足気になっこりした。

引きこもり山桜桃の社会適合計画はさておき、いつまでもここにいて破壊現場の責任を取らされるのは嫌だ。四人は学校方向へ歩き始めた。

「それで、侵入した蟻嬢ぎじょうはぜんぶ始末できたのか？」

「どうだろ。あの現場を見に保全局員が来る前だと思うってすぐ切ったから、聞かなかった」

「たぶん平気よ。ハンターだってそれなりにいるんだから、一人じや無理でも、数人がかりでやれば問題ないし。たとえ変異種がいたって、詠唱担当が数人いれば増えないわけだし」

「ええと……でも、気流転変を止めるって気づかないと、どの詠唱で増えるの抑えられるのか分からないと思う……」

遠慮がちな主張は、もしかしたら保全局に連絡を入れた方がいい

と促されているのかもしれない。

被害が増えるのはたしかに嫌だしな、とまどかが携帯を取り出そうとした時だった。

びくりと山桜桃が震えた。

「「山桜桃？」」

兄とミラがそれぞれ声をかけたが、彼女は聞いていなかった。聞こえていなかった。

大きく目を見開き、蒼白そうはくな顔を斜め上に向けたまま固まっている。

今まで何度か彼女はそうして異常を感知することがあったが、これはいつもの比ではなかった。

小さな唇が震えていた。開きっぱなしの眼はすぐに乾燥して、ぼろぼろと涙をこぼしていた。恐怖とも驚愕ともつかない表情は、不条理な死を強要された殺人事件の被害者のように深く刻まれていた。

彼女の周りにだけ異質な空気がとりまいていた。

どうしたらいいのか分からない三人の前で、山桜桃は震える指を、必死に視線の方向に向けた。

「高校、に。いる」

声にならない悲鳴を押し殺し、他の人に理解できる言葉を紡ぐ。ただそれだけの事が、彼女にとってはとてつもない努力を要した。意識を逸そらせたら、狂気に呑み込まれそうなほどの『力』。恐怖。恐怖。恐怖。

「何がいるんだ？」

まどかの問いに返事はなかった。

山桜桃は指を指しているだけで精一杯だ。

ぱん、と自分の顔を両手で叩いて気合いを入れた鬼灯きぢょうが、妹を抱え上げる。彼女は子猫が身をすりよせるように兄の胸に顔をうずめた。

ミラと鬼灯が高校に向けて走り出す。

なんだかよく分からないまま、まどかも二人を追った。こういう事態の時は、ずっと山桜桃と共にいる二人の方が慣れているし、間違わない。

＊

気づかれませんように。

江上冬えがみふゆはそう祈りながら走っていた。

最初、避難は形だけのものだった。防衛区域と外との境界は遠く、こんなところまで妖獣が来るとは誰も思っていなかった。

だから学生でありながらハンターの資格を持つ円城田えんじょうまちだが見事な反神経で体育館を出て行った時も、教師の指示に従って全員で移動する時も、まだ余裕はあった。

地下道を歩きながら、大通りを越えた向こう側へと渡る生徒たち

に切迫感はどこにもない。

「円城ってホントにハンターなんだ」

「見た見た。かつこよかった！」

「えー？ 良かったけどー、でも今ごろカタナとか振り回してんだよ。あたしはナシ。絶対ナシ」

かがもり
加賀森や周囲の女子が緊張感なく話している時も、笑顔を作れていたと思う。

「冬は？ さっきからずーっと黙ってるけど、ナニ、本気であいつが怖かったわけ？」

「怖くはありませんけど、でも、特に仲良くしたいとも思いませんので……」

集団で移動する時の常で、普通に歩くよりも数段ゆっくりとした歩調。話をするのに適した速度は、急がせて事故が起こるよりいいからだ。

「うわ、何気なにげにさくつと切り捨てたね。円城カワイソ」

「そういうの、気にしないヒトだと思いました。そんな事より、これって帰りが遅くなりますよね。せっかく午後はヒマだと思ったのに、残念です」

「やだー、冬さんヒドイ。こんな非常事態ふきんしんに不謹慎ー」

「そうですか？ 湊みなとさん、帰りのヒマ時間に通学路にあるお店チェックとかしようと思いませんか？」

「……それは、思ってたけど」
やっぱりと笑いあえば、空虚と信頼が冬の胸に交錯こうさくした。

ヒドイのなんて、自覚している。

不謹慎なものも、知っている。

でも、それ以外にどう取り繕^{つくろ}えばいいのか分からない。

笑顔という一番分かりやすい仮面をかぶりはじめてから長くて、ごまかさない自分なんて想像もつかない。

そうして皆で移動していたら、後列から悲鳴が聞こえた。

「なに？」 「妖獣？」 「うそ！」 「どうしてここまで？」 「知るか」

「逃げろ！」

疑問が恐怖に変わるのは一瞬だった。

逃げろ、と誰かが叫んだ時には、もう生徒たちは列を崩して走り出していた。

冬も、あつという間に人の波に呑^のみ込まれた。

何度もぶつかられ、体が後ろへと流される。

(どうしましょう)

見回しても、周りに知人は見つけれられない。

加賀森も湊も、顔を覚えていた同級生すらない。多数の生徒たちが血相を変えて互いに押し合い、押しのけながら走ってゆく。狂乱に近い。

「知らない人ばかり。……だったら、どうせはぐれちゃったんなら、少しくらいなら……」

するり、と人の波に逆らって隙間^{すきま}に潜り込む。

体の小さな冬には、こうして人混みをすり抜けるのはそう難しいことではない。ほんの小さな隙間があれば十分だ。——足さえ

ついでに。

途中、何度か人の腕にひっかかって地面から足が離れて運ばれたので、素早くとはいかなかったが、冬は踏みつぶされることもなく地下道に戻り、学校にたどりついた。

悲鳴が上がったと思われる場所に。

自分がヒドイのを自覚してはいても、ヒドイ自分でいたいわけではない。できる範囲であれば、素直に動きたい。

冬はそつと玄関にすべりこんだ。

靴をはき替えに列を離れた生徒が数人、壁際に追いやられていた。かべぎわ

（こんな非常時に靴を気にするなんて、さすが人間が違いますねえ。可愛い子もいっぱいですし、時代が違ふとこんなに変わるんですね）
こんな時だが、つい、にこにこしてしまう。

下駄箱に背を押しつけている女子高生たちは、リボンの色が違うから他の学年だ。冬は学年を特定されないように自分の制服のリボンをしまった。

傘立てにさしてあった傘を引き抜き、妖獣の侵入で割れかけていたガラスを叩く。

「あいたっ」

派手に割って注意を引こうとしたのだが、ガラスは思いのほか丈夫だった。人種の変化（背が大きかったり、全体的に垢抜あかぬけていたり）もそうだが、技術の進歩もめざましい。

冬は咳払いせきばらをして仕切りなおした。
まあいい。ガラスは割れなかったし、反動で手が痛くなったが、
妖獣も生徒達もこちらを向いた。結果オーライである。

「どうもこんにちはー」
大袈裟おおげさに手を振ると、前脚で一人を踏み倒していた巨大アリは冬
へと正対した。

わずかに緩んだ脚に、生徒が逃げようともがいた。
しかしそれが却って妖獣の意識を惹ひいた。遠くの獲物より近くの
獲物、とばかりに牙が生徒の首筋を引き裂こうとする。

「ダメですってば！」

冬は、反射的に手を出していた。
足元に傘が落ち、しゃら、と小さな音がした。伸ばした制服の袖
から、銅色の棒が飛び出た。

腕力などなくても、それは妖獣の体を貫く。断末魔の咆哮ほうこうがあが
るのを、冬は耐えた。

（これくらい、平気。ぜんぜん平気）
現にびりびりと小刻みに揺れる棒は、手の震えのせいではなく、
咆哮による振動だ。

「早く逃げて下さい！ そうじゃなかったら、その人たちが助け
てあげて！」

叫べば、殺されかかっていた学生と、硬直こうちよくしていた女の子たちが
我にかえる。精神を引き裂く咆哮の下、蒼白そうはくになりながらも協力し
て、アリもどきの下から脱出した。

「あなたも」

「こっちは大丈夫ですから、早く逃げて下さい！」

自分の事まで心配してくれるなんて、いい人だ。だったらなおさら早く避難して欲しい。――この場合は、あらゆる意味で危険だ。

真剣に指示したのが効いたのか、生徒たちは地下道へと走り出した。足取りはまだふらふらしていたが、獣はこの一匹だけ。追いかけてゆくモノはいないから、この場から離れてくれさえすれば安心できた。

空を見上げれば、暗く垂れこめた雲。静かに降り続いている雨。何も、変化はなかった。

（良かった。見つからなかった）

ホッと息をついて妖獣を見上げると、ソレはすでに動かなくなっていた。

突き刺していたものを袖の下にしまう。しゃりん、と涼やかに鳴った音は、倒れ伏す獣のつくる地響きに紛れて聞こえなかった。

「これで大丈夫……」

呟いて制服の胸元をつかんだら、

「江上冬？」

遠く離れた校門から、驚いた声がした。びくっと肩がはねる。

「み、見ました？ 私ナニにもしてません幻覚です気のせいです見間違いです……って、静義殿？ 戻って来るの早すぎ」

「え」

振り向けば、愕然^{がくぜん}とした様子の学生がそこにいた。
年相応の幼さを少しだけ残した整った顔と、縦に伸長しすぎて筋
肉の追いつかない体。

「いま何って言った？」

少年はものすごい形相^{ぎようそう}で校庭を走って来る。濁^{にご}った水たまりを避
けようとしてもしないで、一直線に。大きな手がこっちにむかって伸ば
される。

いつの間に來たのか、分からなかった。

いや、それよりも。気づけなかったことよりも、つい彼の名を呼
んでしまったことが失敗だった。

せっかくここまで知らないふりをしてきたのに。
彼も気づかないでいてくれたのに。
だいなしだ。

（ああもう最悪。私のばか）

11 みつけたものは、探しものとは違いました。

懐かしい呼び方をしたのは、始業式で会ったばかりの江上冬だった。

「いま、絶対おまえ静義殿しやぎてんって言ったよな？」

これだけは聞き間違えない自信があった。

まどかは彼女の手を捕まえようとしたが、冬は軽快なフットワークで身をかわした（リスザルか、お前は）。

「……。なにその身軽さ。じゃなくて。お前、やっぱりあの冬だろう。なんで」

そんな行動をとられる覚えがなくて、まどかは動けなくなった。感動の再会なんて思ってたが、こんなふうには逃げられるなんて予想外だ。

固い表情は、今や全身でまどかを警戒している。

「……ウソだろ……」

記憶にある冬とはぜんぜん違う。大好きだった笑顔がどこにもない。鷹揚おうようさや優しさ、配慮はどこへ行った。

「お前、頭でも打った？」

「……ふつう、オレ何かしたかくらい言いません？」

「いや、お前がボケかます確率の方が高い。肥溜こえだめに落ちるわ、川に流されるわ、地藏そなに供えられてた饅頭まんじゅう食って腹こわすわ」

「記憶にありません。お饅頭にあたって下痢げりしていたのは静義殿しやぎてんじゃないですか。どさくさに紛れてヘンなと言わないで下さい」

互いに睨にらみあう。

なんか再会、ぶちこわし。壊したのオレだけど。

まどかはボリボリと頭をかいた。
冬も、後悔したように視線を足元に落とした。

そんな仕草は変わっていなかった。

どうしようもない時、彼女はいつもそうしていた。一人で抱えんなよと言っても、そうですねと頷くだけだった。自分は一度も、彼女の役にたてた事がない。

「悪い。仕切り直そう。——さっき会ったよな。前の印象しかなかったから、お前だって気づかなかったんだけどさ、冬もそう？
だったら二人してマヌケだな」
まどかが気を取り直そうとしていたら、

「なにに、あんたがその妖獣退治してくれたの？」
「うわ、山桜桃も小さいけど、君も小さくて細いねえ」
どやどやとミラや鬼灯が追いかけてきたので、場は一気に賑やかになった。

邪魔だ。これでは込み入って立ち入った話ができない。
追い払おうと振り返ったまどかの瞳に、細かく震える山桜桃の姿が映った。

彼女は、さっきの神がかり的な空気はもうまとっていなかった。
兄に抱えられたまま怯えながら、惹き付けられるように冬だけを見つめていた。常ならざる雰囲気を感じて、鬼灯もミラも口を閉じ、少女二人を見比べる。

一目で分かる神秘性をそなえた山桜桃は、漆黒の髪と漆黒の瞳。
大人しくて滅多に自己主張をしないが、彼女はどこにいても目立

つ。人の世とは交わらない、別種の気配を持っている。

対する冬は、そういった特異性がどこにもなかった。小さい以外、特徴が無い。

ほとんどの学生と見分けのつかない茶色の髪を揺らして、困ったような笑顔をミラに向けた。この場を穩便おんびんに収めて欲しいと思っているのが、傍目はためにもうかがえる。

「えーと。まず謝ってみようかな。そのヒト、ごめんねえ、あたし山桜桃と静義の味方だから。この子たちが迷惑をかけたなら助けてあげるんだけど、今違うでしょ」

冬の笑顔が苦笑に変わった。

「私こそ、他力本願ですみません」

その方が手っ取り早いもので、と聞こえた気がした。

始業式の時の加賀森みたいに、勝手に場に応じた解釈してとりなしてくれるのを望んでいたのは明白だった。

まどかの頭にカッと血が上った。

「お前」

だが、まどかが怒りと疑念をぶつけるよりも、山桜桃が暴き晒さらしだす方が重かった。

意識せずに全てを感じとる少女は、焦点の合いにくい瞳を懸命に凝こらす。

「……さっき感じたのに。もう分からない。隠したの……？　ずっとこの街にいたのに、わたし、分からなかった。さやぎ、じゃなくて、まどか君みたいには見つけられなかった。どうして……？」

いつも周囲に埋没している少女は、困ったようだった。山桜桃を見て、まどかを見て、それから一步下がった。

「見つけて欲しくないからです」

まどかは理解した。

冬は、わざと彼を避けていた。
知っていて、知らないふりをしていた。

もう一度会いたいと思っていたのは自分だけだったかと思うと、腹が立つ。名は、二人だけに通じる符丁だったのに、それすら無意味だった。

「なんでだ？ オレは」

「私は今、預かり物をしているんです。それを返すまでは目立ちたくないんです。静義殿はハンターとして有名ですから、一緒にいると、ちよつと……」

「ちよつとって何だよ！ オレは、もしかしてお前がいたら、この名前に興味を持って会いに来てくれるかと思ったのに！ だから頑張ってみたのに！」

「……」

彼女は人指し指を額にあてて、考え込んだ。ため息をついた。

なんだか修羅場しゅらばな雰囲気がいやに、外野三人が口を閉じて彼女の言葉を待つ。まどかも、拳を握りしめて待ってみた。

「あのですねえ、よりにもよってこのタイミングで私と静義殿が会うって、おかしくないですか？」

「あ？ 何言ってるんだ？」

話が飛んだ。

「預かり物とこの出会いが、ただの偶然じゃないって申し上げてるんです」

「……誰かが仕組んだって？ なら、誰が、なんで」

「……誰かろりよくどのが仕組んだって？
おうすいどの
閨緑殿と櫻水殿の二択でどうぞ」

「誰？」

両方とも知らない名前だ。怪訝けげんに眉を寄せたら、冬が申し訳なさそうに肩を縮めた。怒っていたはずなのに、まどかの方が罪悪感を覚える。

「ふ……」

「別の場所で、時間も経って、それでも出会うのは奇跡さいしか作為。私はもちろん作為だと思います。私の知る静義殿は、誰かに操いとられるのを厭いとう方でした。あなたもそうなら、これ以上むかしの思い出を求めるのは止めてください」

「冬！」

冬は制止に応じず、くるりと身をひるがえした。

明確な足取りで生徒たちの避難した場所へと歩いてゆく。――

――まるで、そちらが自分のいるべき場所だと宣言するかのように。

「冬！」

何度まどかが叫んでも、戻ってはこなかった。

食いしぼった歯が、ぎりつと音を立てた。

考えた事もない断絶だった。まどかは追う事もできずに、冷たい雨の中に立ちつくした――。

13 へこんでます。暗いです。(前書き)

解析機能つてものによろやく気がつきました。
読んでくださっている方がいると知って、小躍り^{こおどり}。ばんざい。
ありがとうございます。

13　へこんでます。暗いです。

「探してたのは、あの子だったのか？」

濡れたままだとカゼをひく、と放られたタオルを頭からかぶって、まどかは顔を隠した。本当は一人でいたい気がしたが、実は面倒見のいいミラと鬼灯きぢようはそれを許さないだろう。

言い合いをするのもめんどろで、まどかは連れてこられた鬼灯の家で雨を含んだコートを脱ぎすてた。

「たぶん。見た目も性格もぜんぜん違ってたけど、オレのこと元と呼び方で呼んだし……」

本当は自信がない。

冬はあんなふうに誰かを拒絶する人間ではなかった。すつとぼけて天然だったが、世が世ならノーベル平和賞でも受賞できんじゃないやねえってくらい、すべてに手を差し伸べる性格だった（……いや、やっぱりあいつが受賞するのはコワイ。世が世でなくて良かった）。

「アタリはアタリなんじゃないの。よく分かんなかったけど、静義とは話通じてたじゃない。単に、探し人が静義の望んでいた反応を返さなかったってだけでしょ」

「まあな……」

ミラは正しい。

拒絶と変容は信じたくなくても、たぶん江上冬が『冬』だ。探していた相手だ。

「これからどうするの？ 人探しのためにハンターになったなら、見つけちゃったんだし、パーティ抜ける？」

「ミラ」

咎める声で仲間の名を呼んだ鬼灯は、気づかう視線でまどかを見る。
る。

わだかまりを抱えている時に、早急すぎる質問だった。

しかしミラは、分かっているのだ。そうしないと、まどかが一人で考えすぎてどんどん落ち込んで行くのが予想できたのだろう。

抱えこむ人間は一人で十分だと、猫に似た瞳が語っていた。

「……やめない」

現在進行形で考えこんでいる山桜桃ゆすらは、まどかの答えにも笑顔を返すことはなかった。鬼灯に滴る黒髪を拭かれるまま、焦点の合わない表情でただ座っている。

まどかには分からないが、妖獣を倒した冬が、とにかく怖かったらしい。

「そう。じゃあ、改めてよろしくねー」

見かねたミラはまどかに言うと、山桜桃の腕を取って浴室へ連れて行った。髪の毛の長い女性は、ちょっと拭いたくらいではどうにもならない。

途端に静かになったリビングで居心地の悪さを感じた鬼灯は、コーヒーを淹れ始めた。

「……俺たちの事を考えてやめないのなら、気にするなよ。生きて行く分には三人でも困らない」

「分かってるし、そういうつもりじゃない。今、他に発散できそうなのがないから」

鬼灯と山桜桃は、妖獣退治の報奨金で二人で暮らしている。

母親は山桜桃を生むとすぐに亡くなり、父親は妻を殺した山桜桃をおそれて逃げたと聞いた。

殺した、とは出産による死亡という意味ではないらしい。腹の中で母親の命を吸いつくして生まれたと、父親はそう狂乱して病院から走り去ったそうだ。

だから二人は途中までは親戚の家で育てられ、鬼灯が高校生の時にハンターになってからはこうして暮らしている。

山桜桃は産声もあげずに生まれ、成長してもさっきのように焦点の定まらない眼で空中を見ている事が多かったので、親戚にも気味悪がられ、疎まれていたという。親戚の家は、二人に取って居心地のいい場所ではなかったのだろう。

鬼灯は短く笑い声を立てた。

「妖獣退治でストレス解消なんて、お前くらいだろうなあ」

「ミラだってやってると思う」

「そうか。そうだな」

大雑把な顔にくつろぎを感じさせる表情を浮かべて、鬼灯はコーヒーを運んで来た。山桜桃が淹れる時はソーサーに乗せられるカップだが、彼はそのまま持ってくる。当然スプーンもミルクも砂糖も

ない。

あったら使うが、なくても平気なのでまどかは素直に礼を言って受け取った。

湯気が立つ。飲む。その間は部屋に沈黙が落ちる。

黙っているのも辛くなって、まどかはタオルをかぶったままソファの背もたれに頭を乗せた。少しくすんだ天井が、タオルの間から見える。

「……鬼灯はさ、きつくてつまらない事ばかりで、その中で一つだけ幸せなことがあったらどう思う？」

「その幸せを守りたいかなあ」
落ちついた声で、穏やかに即答された。

彼にとっての幸福は山桜桃^{ゆすら}だ。それからミラ。

実は重い人生を送るの鬼灯は、今は他にもいろいろと幸せを手に入れている。大学の友人やサークルの話をする時、彼はとても楽しそうだ。

もしそんなふうになれたなら、何かが違ったのだろうか。

まどかは思いかけ、記憶にふたをした。ため息が漏れた。

「オレにとって、『冬』ってそういう存在。一緒にいたのって一月くらいだったけど、野良犬が優しく頭撫でってくれる人間になつく感じ？ だから今度も、寄ってったら撫でてくれると思い込んでた。追い払われるなんて、思わなかった」

「自分を野良犬に例えるのはどうかと思うが、俺も分かるなあ。昨

日までふつうに友達だったのが、いきなり話しかけるなって」

話題が話題なので、二人で沈む。へこむ。

「たぶんあいつは山桜桃のこと聞いたんだ。それでヘンな兄妹には関わるなって周りに言われたんだと思う。へこむけどさあ、でもそういうふうには理由はあるんだよな。さっきの子にも理由はあっただろう」

「預かり物？」

「そう。あと、誰かの作為さくゐ。こうやって期待させるのがいいのかどうか俺には自信がないんだけど、それを何とかすれば元に戻れるんじゃないのか？」

どうなんだろう、とまどかはわざと冷静に考えてみた。

鬼灯の言葉は希望を持たせてくれるし、気持ちはそうであると信じたがっている。

しかし、手放して信じるのはまだ怖かった。信じきれない。

冬は、普通ならハンター数人がかりになるはずの蟻嬢ぎじょうを一人で倒した。それだけの腕があるのに、人を守るハンターにはなっていない。

自分と初めて会った時なんて、縁もゆかりもない村のために、死にそうになりながら狼を追ひ払っていたのに。

時が経ったと分かっている。今と昔は違って当然なのに、下手に優しくされたから、夢を見たがってしまう。

自分は往生際が悪いのだろうか。諦めた方がいいのだろうか。

人が偽るのも変わるのも当たり前だ。言われたように、思い出なんて追わない方がいいのだろうか。

まどかが自分の思考にどつぷりと嵌まりかけていると、勢いよくドアが開いた。

「やっぱりこうなってるわけね。どうして鬼灯ったらフォローしないのー？ うっとおしい。この部屋にカビが生えたらあんた達のせい」

シャワーを浴びてきちんと髪を乾かしたミラが、ずかずかと入ってくる。

山桜桃は引っぱ張っていかれた時と同じく茫洋ぼうようとしていたが、温まったおかげで蒼白そうはくな肌は桃色に変わっていた。

「フォローはしてくれた。オレが勝手に考え込んでただけで」
「高校生に庇かばわれる大学生ってどう？」

彼女は、脱ぎっぱなしにしていたコートをハンガーにかけた。かぶっていたタオルでまどかの髪を拭き、てきぱきと世話を焼く。

「どうなんでしょうねえ。とりあえずコーヒー飲むか？」

二人分のカップをテーブルに運んで来た鬼灯は、今度は忘れずに砂糖その他も用意していた。抜かりはない。

ふ、と山桜桃の視点がコーヒーに注がれた。

音もなくキッチンへ向かうと、ストックしていたクッキーを持ってくる。

14 復活は、不死鳥の羽よりクッキーで

とりあえず少女の意識は日常に戻ったらしい。

鬼灯とミラがそつと安堵あんどの息を吐いた。

「そういえば、静義しやぎって始業式に戻らなくていいのー？」

「学校にも蟻嬢ぎじょうが出たんだぞ。あれを撤去するまで教室なんていけないって。初ホームルームは明日って賭けてもいい」

カゴに盛られたクッキーは山桜桃ゆすらの手作りの残りで、まどかは左手につかめるだけつかんで、ぼりぼりと食べ始めた。

糖分が低下している時にものを考えると、思考まで下降する。落ち込まないための予防だ。

「というのはタテマエで、単純に山桜桃のクッキーが美味しいからでしょ。もう、一人で食べないでよ」

ミラが細い指で、左手にキープしていた菓子の半分をさらっていった。

「横暴」

「どっちが。四人いたら四等分なの。レディファーストって言わないだけマシでしょ」

「ぜったい却下。ミラに優先権を与えたら、オレまで回らないに決まってる」

「あんたじゃないんだから、そんな事するわけないじゃない」

「いいや、する。鬼灯に食わせないために、絶対する」

「あ。鬼灯おにとうが入ったら、そうかも」

たまに子供になる二人のミニクイ争いを横目に、鬼灯が話を戻した。

「……静義が騒いだから忘れかけてたけど、高校を襲った蟻嬢ってあの子が退治したんだよな。山桜桃はアレに何を感じてたんだ？」

「あの人も『力』のある人。お兄ちゃんや静義みたいに生命力なのか、わたしみたいなのは分からなかったけど、トータルで強い人……凄すぎて怖かったけど、静義だったら頑張ったら並べるのかな……」

少女は小さくクツキーをかじって、まどかの視線を避けた。

「はいストップ。山桜桃はそこで落ち込まない。存在力が静義とみあうかどうかなんて関係ないんだから」

「……ここはコメントしないほうが安全だ。下手をするとミラにぷちつと潰される。」

まどかはクツキーに専念する。

「てか強いのはいいけど、あの子どうやって化け物アリをやっつけたのかしら。見た目華奢きゃしゃだったから、あたしと同じ魔法使い？ それとも山桜桃みたいな……のはナシか。詠唱で妖獣は倒せないもんね」

「そういえば見なかったな」

まどか達が駆けつけた時には、蟻嬢は地面に倒れていた。その後も死骸なんて気にもとめていなかったが、致命傷が分かれば採った手法が分かる。ほんの少しでも、冬の事が分かる。

携帯を取り出したまどかは、保全局の短縮ダイヤルを押した。

三人が注目する中、高校まで突撃したアリもどきの傷を尋ねる。

『南東北高校？ ああ、目撃証言はあったんで局員が出向いたんだがな、なんにもいなかったぞ。きっと別の場所に移動したんだろうな』

「は？」

そんなわけではない。死骸はきちんと（というのもおかしな表現だが）玄関に倒れていた。話が聞こえている三人も、不審を隠せずにいる。

『けど、そうすると数が合わないんだよな。侵入したのが八匹で、退治の報告があったのが七匹。お前達、無限増殖タイプだったんだろ？ 実は数え間違いで、元は三匹だったりしないか？』

「しない」

それは確実だ。まどかは局員が現場の惨状を思い出す前に、またもや即行で通話を終わらせた。

リビングに沈黙が落ちた。

全員で、顔を見合わせる。

「いったい、どういうことだ？」

当然、誰も答えは知らなかった。

15 インターログ（前書き）

かーなり、ホラー気味です。

たぶん読まなくても話はつながるので、苦手な人は自主避難してください。

15 インターログ

＊

白い小さな獣が、ビルの窓辺から中をのぞいていた。

女性向けの服や雑貨を扱うテナントが複数入っているビルの三階。その上部にある換気用の細窓の枠に前肢をちょこんとかけた姿勢で、長い時間、そよとも髭を動かさず、白目の無いぬめる瞳で中をのぞいていた。

「聞ってる？ 三人目だよ、三人目！ もうヤダ！」

服のかかったハンガーを次々に右へと移動させながら、少女は携帯電話に向かって怒鳴っていた。もっとも彼女のメイクは濃かったので、二十代後半にも見えた。少女と表現するには、多少ひっかかりを覚える外見だ。

「あんたが調子に乗るから。……知らないよ、そんなの。あたしじゃないって！」

その一列にかかっていた服を全て見るだけ見て、乱暴な足取りで隣の店に移動しようとした彼女は、電話の相手がキレた声で怒鳴り返すのを聞いた。

——それから、鋭い、暗い音を。

悲鳴に近いが、人の声ではない。重い、重い音。肉の塊が潰れる音もした。全く関係のない音に、背筋が冷えた。ゾツとする。

「何？ 心愛、あんた何してんの」

『何って。そっちこそ、いきなり何よ』うがあああああっ』

「心愛っ？」

『だから何なの？』ああああああっ』

いつも一緒に遊んでいる相手の声が、どこか遠い。その後ろで、彼女の声に重なって上がる絶叫の方がリアルだ。

激痛をこらえる絶叫に気づいてしまえば、もうその悲鳴を拾う事に集中するしかなかった。息をひそめて、携帯を耳に押し当てる。

ごっ、と音がした。

途切れない断末魔^{だんまつま}の悲鳴に混ざった、くもぐった音は知っている。厚めの肉の下で骨が折れる時の音。いつかどこかのデブを思い切り蹴った時に同じ音を聞いた。

続く、づぢゃ、という鈍い音は知らない。知らないが、固い物が柔らかい物を突き破っている濁音^{だくおん}は、想像がつくだけに嫌なかんじだ。

『ちょっと聞いてんの？ ねえ！』———ちゃ、ぴちゃ———
友人の声がうるさかった。ただ、かすかに聞こえる液体の音はわかる。痛みにもだえる誰かに、ふざけて灯油をかけてやった時と一緒。

「心愛、心愛、あんた今何してんの、ホントに大丈夫？」

『はあ？ 大丈夫って、ソレあたしのセリフ。あんたおかしくなってるんじゃない？』轟音^{ごうおん}。

耳元での爆音にびくつとして、彼女は携帯を床に取り落とした。ワンバウンドして、くるくる回る長方形をみつめる。

分かった。

友人の声にかぶって聞こえる音は、いじめでも悪ふざけでもない。交通事故だ。

最初のは車がガードレールを突き破る音。絶叫は、轢かれた人間の声。骨が折れて、それが肉を突き破った。そしてガソリンが流れて爆発。そういう、一連の音。

でも、どうして、そんなのが聞こえるの？

恐れを宿した目で携帯を睨みつけた彼女は、怖がる自分に腹を立ててもいた。平気なふりで、壊れてしまった携帯を拾う。

画面が黒い。ひびまで入っていた。

構わない。こんな気持ち悪い物、買いかえてやる。彼女がそう思った時だった。

壊れたはずの携帯から、突然さっきの絶叫がもう一度響いた。

「きゃあつ」

周りにも聞こえるような大声をあげてしまった。ショップ店員や客が一斉にこっちを向いた。

その、目。責めるような、目。

「……なによ」

たじまりようこ

田島涼湖が自殺した件に自分が関わっていたと知った時の、滅多に帰ってこない両親から向けられた目。弟の目。近所の、知り合いの、同級生の、全然知らない他人からの、蔑むような目。さげす

「何みてんのよ！」

イジメなんて、それくらい誰だってやってるのに、自分だけじゃ

ないのに、自分だけが悪いと決め付ける人間達の目。

「あたしじゃない、涼湖が悪い！ 大人しくしてればいいのに、巫女だなんてバカ言って、謝らないから謝らせようとしただけなのに！ あんなに人が来るとは思わなかった、死ぬなんて思わなかった？」

注目してくる視線に抗い、少女は怒鳴りながら周囲を睨みつけた。いつもなら睨んだだけで目を逸らすはずの人々は、いつまでもどこまでも彼女を見つめて来た。

「なんで」

目、目、目。責める目が消えない理由は分からなかった。だが、壊れた携帯から響き続ける絶叫の声が誰なのかは思いついた。

彼氏だ。この間事故にあって、見舞いに行ったばかりの彼。

携帯が着信音を奏でた。

携帯を持つ手が震えた。

壊れたはずなのに、いつの間にか、メール表示の画面になっていた。

ツギハアナタ

「っやあああああああ————っ？」

少女は携帯電話を床に叩きつけた。

二つに折れた。破片が飛び散る。

なのに、彼氏の絶叫だけは携帯から聞こえ続ける。やまない。やまない！

彼女は身をひるがえすと、フロアを駆け抜けた。

逃げたかった。ただ逃げたかった。

人を突き飛ばしてエスカレーターを駆け下り、――転んだ。

ヒールのかかどが溝にはまっていた。ありえない。

体中をエスカレーターの角にぶつけながら転がり落ちる彼女の脳^の裏^{うり}に、呪い、という単語が浮かんた。

エスカレーターのステップに頭を打ち付けて脳挫傷^{のうざしやう}を起こした彼女は、そうして息を引き取った。

白いものはじつとそれを見ていた。

表情は変わらなかったが、どこか満足そうな気配が漂^{ただよ}っていた。

ソレはやがて卓球の球ほどもない小さな頭を上へと向けたかと思うと、垂直な壁をゆっくりと降りた。

＊

16 まどかの日常・その1

翌日――

「へえ、増える妖獣なんているんだ。僕、知らなかったな」

「そういう怖いのはパスだけど、一回見に行ってみたい。まどか、外の見学ツアーを企画しよう！」

「帰宅させなくてもいいなら、いくらでも連れてってやる」

「怖いっ！ 置き去りにすんなよ！」

昨日同様、三人で登校すると、好奇の視線が集まった。

「やあ！ おはよう諸君。本日もこの白鳥にご注目くださって感謝ですよ。特に女子からの熱い視線とメールは大歓迎」

教壇きょうだんにのぼった白鳥は大きさに手を広げ片足をひき、どこの国・何時代だという一礼を披露ひろうした。九割の苦笑と一割の拍手を受けて顔を上げた彼の前を、悠然ゆうぜんと三村が通りすぎてゆく。

「キミにメアドを教えてくれる奇特きとくな女子がいるとは思えない」
「いるって！」

「ああそういえば、僕に渡して下さいってメモをくれた子はいたね。それカウントしちゃダメだよ」

「誰がするか！ つか三村それは自慢なのか？ 自慢なんだな！ くらえ嫉妬しどビームっ？」

素すでプチコントを繰り広げる二人へと注目が集まる。

まどかは感謝して、自分の机を探した。――噂は、もう広がらなくていい。

机の端についている、名前の書かれた付箋ふせんを見ながら歩いていると、江上冬が席を立った。入学当初、席は男女別に五十音順にきめられているので、数人分うしろの加賀森かがもりのところへ話をしに行ったらしい。

「……」

それとも避けられたのだろうか。

冬の隣りの机につけられた自分の名前を見つけて、まどかは渋面じゅうめんを作った。

疑惑は、最初のHRで確実になった。

「――一年は長いようであつという間です。みなさんも遊び過ぎて後悔のないよう、気を引き締め直していきましょう。では最後に、何かありますか」

担任の挨拶あいさつとカリキュラムの説明があつた後の事だった。

冬が体を斜めにして手を上げた。

「すみません、先生。私ちいさくて、黒板が見えないんです。一番前にしてもらってもいいでしょうか」

「ああ、そうだね。相沢さん、替わってもらっても大丈夫ですか」

ちよちよこと小走りになって、すみませんと相沢に謝る冬は、確かに小さい。

身長順に並んだら、文句なく一番前だろう。小さくて、体を斜めにしなければ前の生徒に阻まれて黒板が見えないのも事実だ。

だが、とまどかは思った。

「あいつ、本気で避けてやがる」
自分の隣りにいたくないというのが本音だろう。

「円城くん、僕は思うんだけど、一人の女子を一日中目で追うのは、それが恋だとしても失礼だ」

放課後、三村が訳知り顔で言った。

「一途さとストーカーは、非常に近い」

「そういう時は俺たちに任せろって。ほのかさん達を巻き込んで盛り上げてやる！」

まどかは中味を全部机の中に入れたままの軽いカバンを、騒ぐ白鳥の頭にぶつけてやった。

「実行したら殺す」

そのままカバンを持って教室を出る。後ろで白鳥が頭を押さえてうなっていたが、日常の範囲である。

恋でないのは当然としても、無視されると気分は良くない。

ムカつくしイラつく。

クラスで楽しげに話していた冬は、今日一日、一度もまどかを見なかった。記憶の中の彼女とは違う笑顔を惜しげもなくばらまくせに、ちらりと視線を向けることさえなかった。

いっそ別人だと割り切ったほうが楽だと、何度も思った。のに――

差し伸べられた優しい手。唯一、人間扱いをして笑いかけてくれた。その記憶を捨てるのはもったいない気がした。

もったいないと思う、その貧乏根性が悪かった。

おかげで本日中には割り切れなかった。

きっと明日には思考の切り替えもできるだろう。

もういい。もう今日は考えるのはやめよう。まどかがため息をついて下校の鐘が放送される校庭を歩いていると、校門の方でざわめきが起こっていた。

「？」

女子も男子も、小声でささやき合っている。みんな好意と好奇心を前面に出しているの、事件ではない。

緊急事態でないならどうでもいいと、まどかがテンションが低いまま校門を過ぎると、背後から声をかけられた。

「さ、じゃなくて、まどか君」

驚いて振り返ると、山桜桃^{ゆすら}が泣きそうな顔で立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4045y/>

問い「探しものは何ですか」 答え「転生前の友人です」

2011年11月20日17時06分発行